

# 1.1 プログラムの有効性

(1) 浸水実績でみた被害軽減効果

(2) シミュレーションでみた被害軽減効果

## 1.1 (1) 実績洪水でみた被害軽減効果

総合治水対策の進捗により、過去に発生した水害と同程度の降雨規模に対して、近年では浸水面積、浸水戸数が減少傾向

ほとんどの河川 (13河川) で、総合治水対策による浸水被害軽減効果が現れている。

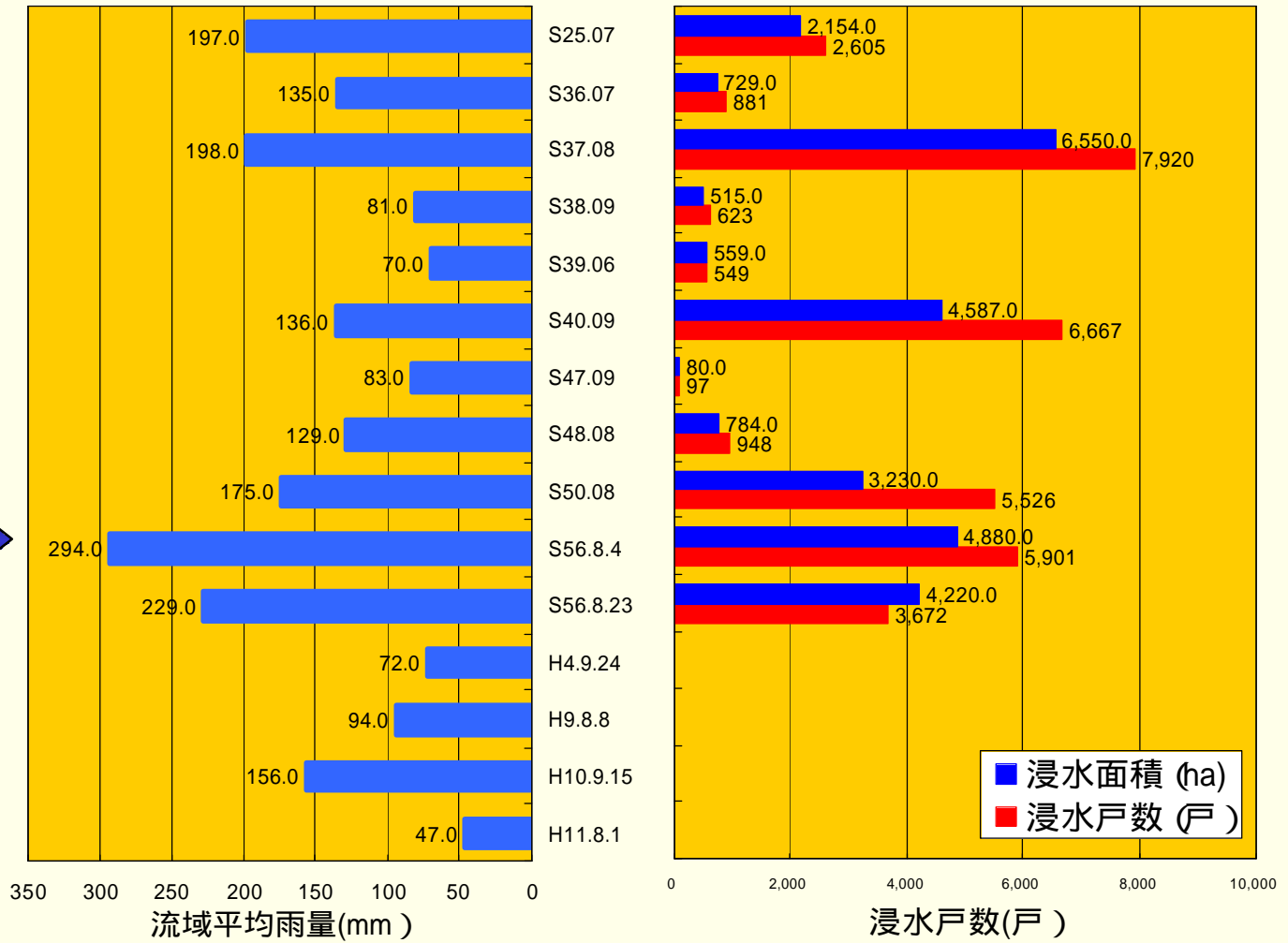
ただし

・残堀川 : 市街化の進展が著しく、流域平均雨量と浸水被害との間に相関がみられない。

・新川 : 東海水害以前では大きな浸水被害は発生していない。

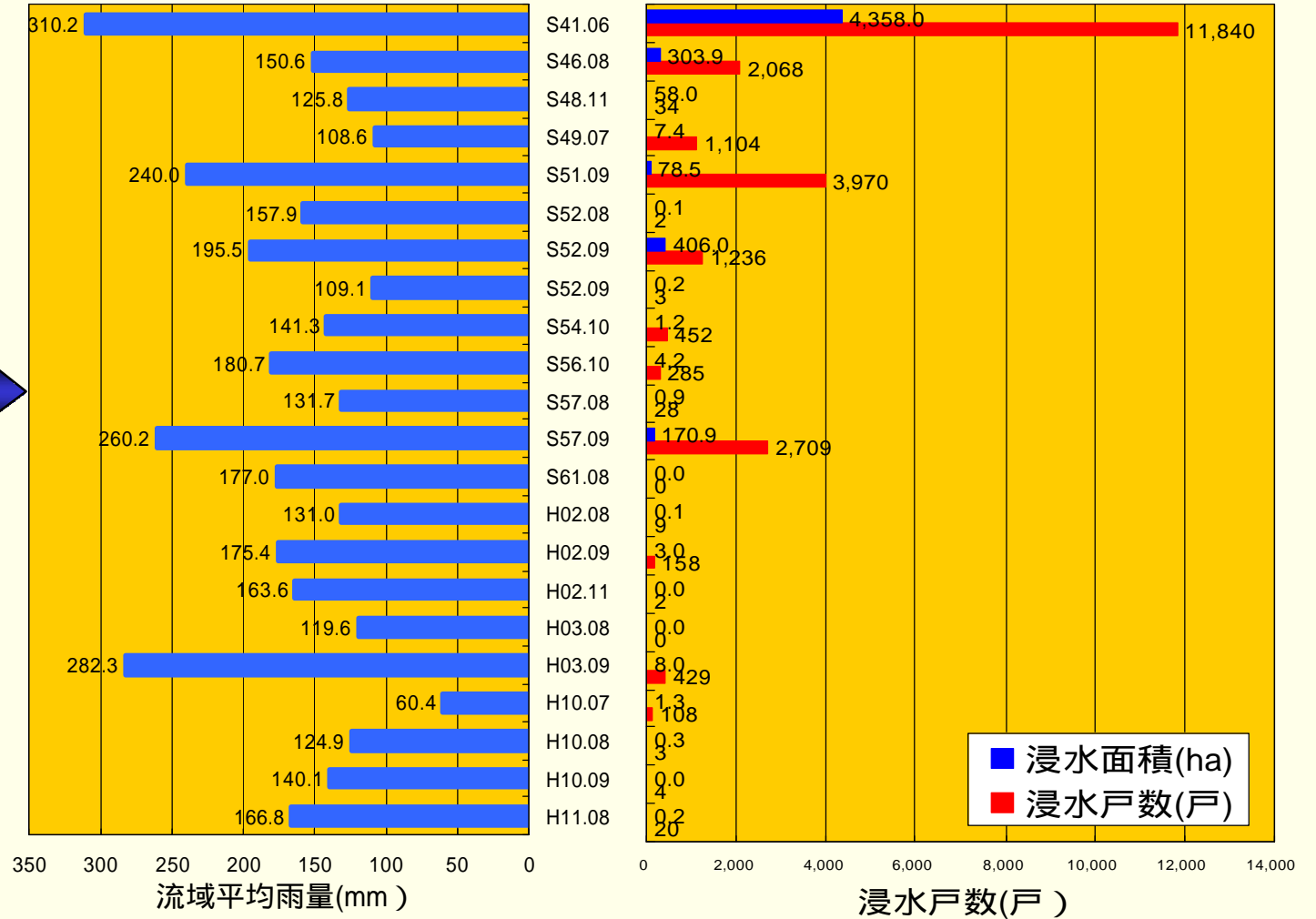
# 伏籠川

総合治水対策着手



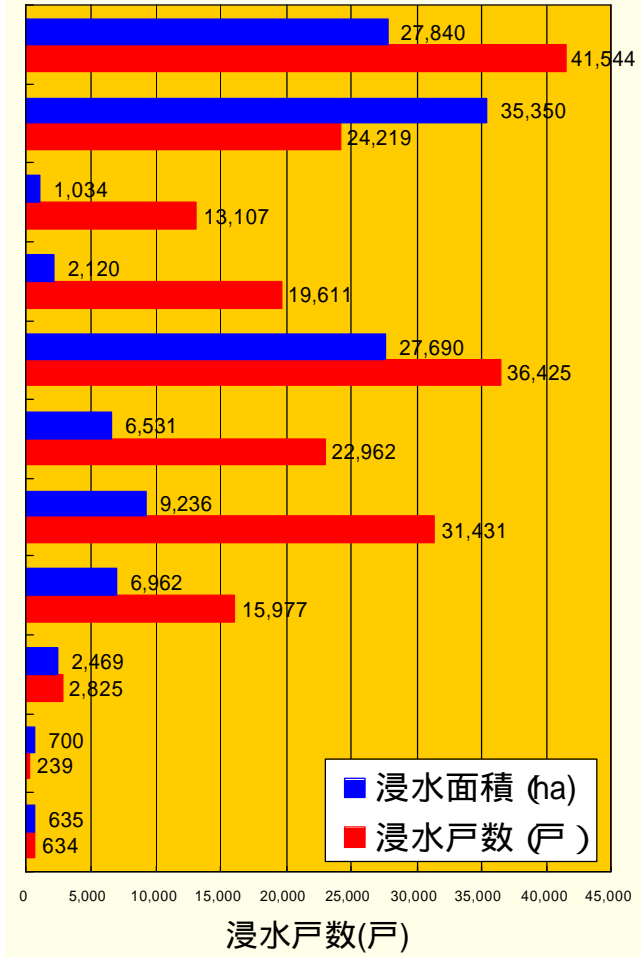
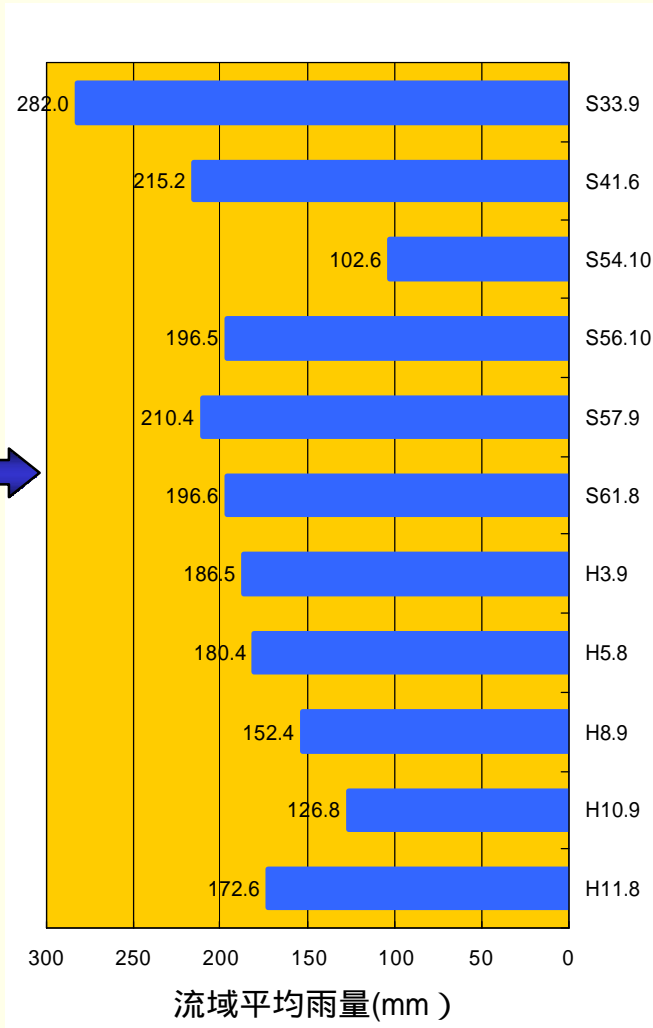
# 鶴見川

総合治水対策着手



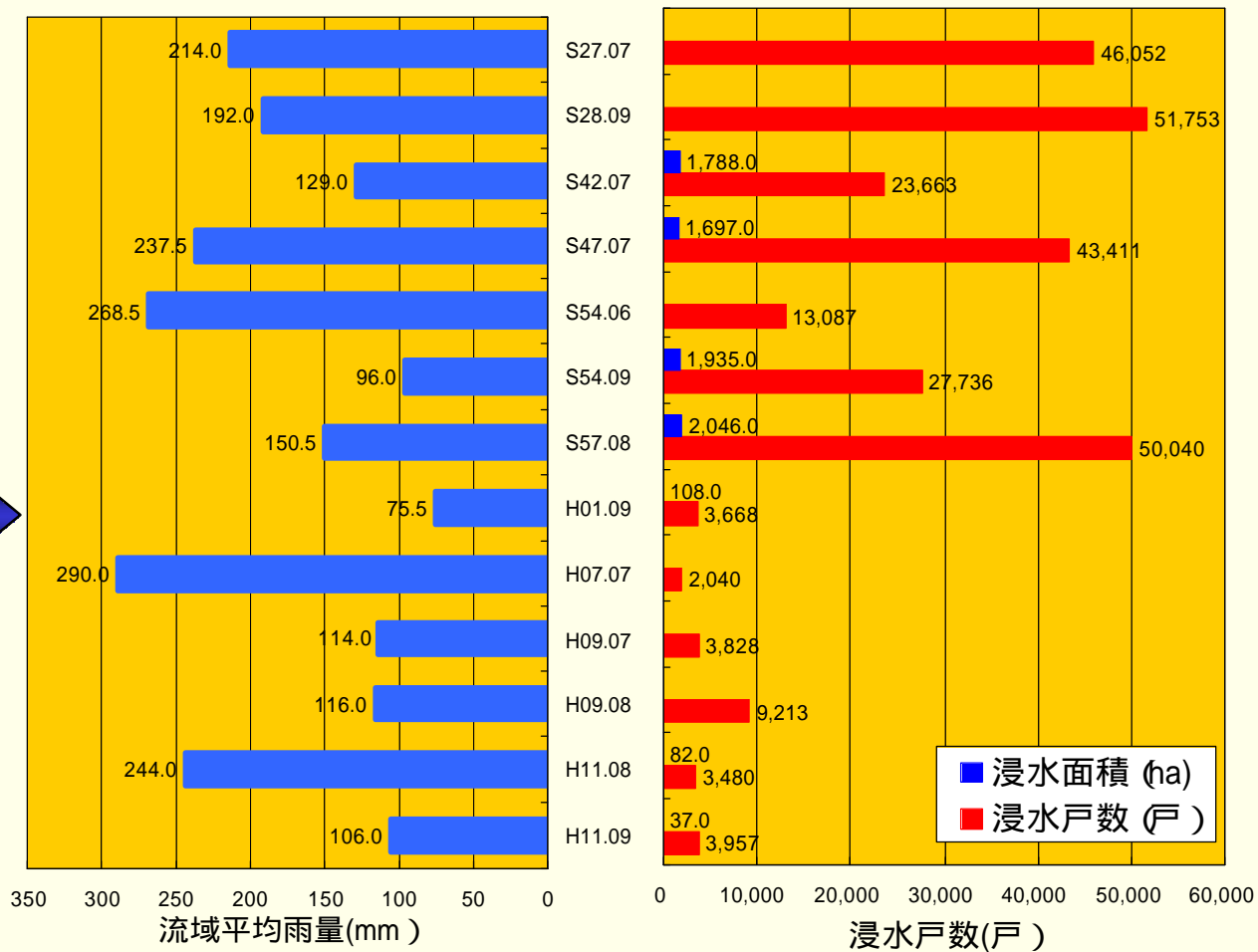
# 中川 綾瀬川

総合治水対策着手



# 寝屋川

総合治水対策着手



# 1.1 ②) シミュレーションでみた被害軽減効果

市街化のインパクトに対して、治水施設・流域対策のある場合とない場合の差を「効果」として評価する。

シミュレーション条件

流域条件と氾濫  
区域資産額

治水施設

流域対策

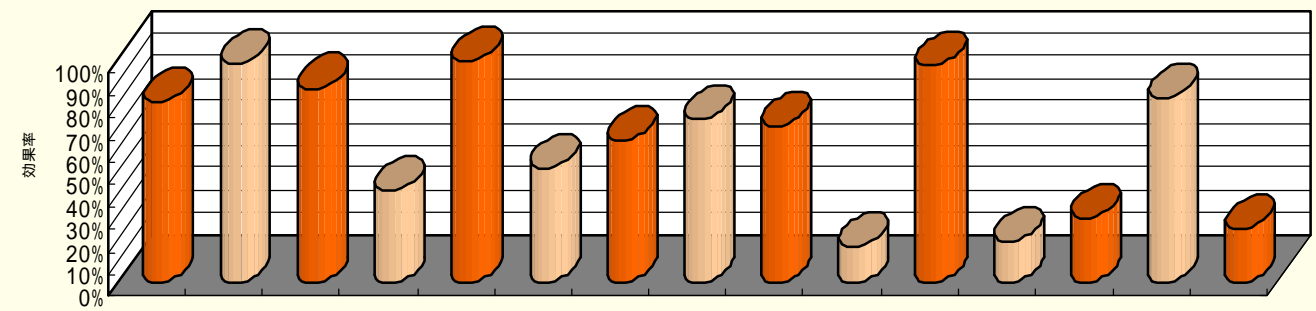
	流域条件と氾濫 区域資産額	治水施設	流域対策	
総合治水対策 全体の効果	現況	着手時点	なし	ケース1
	現況	現況	現況	ケース2
	現況	計画完成	計画完成	ケース3
治水施設整備の 効果	現況	着手時点	現況	ケース4
	現況	現況	現況	ケース5
	現況	計画完成	現況	ケース6
流域対策の 効果	現況	現況	なし	ケース7
	現況	現況	現況	ケース8
	現況	現況	計画完成	ケース9

例えば被害軽減効果は = 
$$\frac{(\text{ケース1}) - (\text{ケース2})}{(\text{ケース1}) - (\text{ケース3})}$$

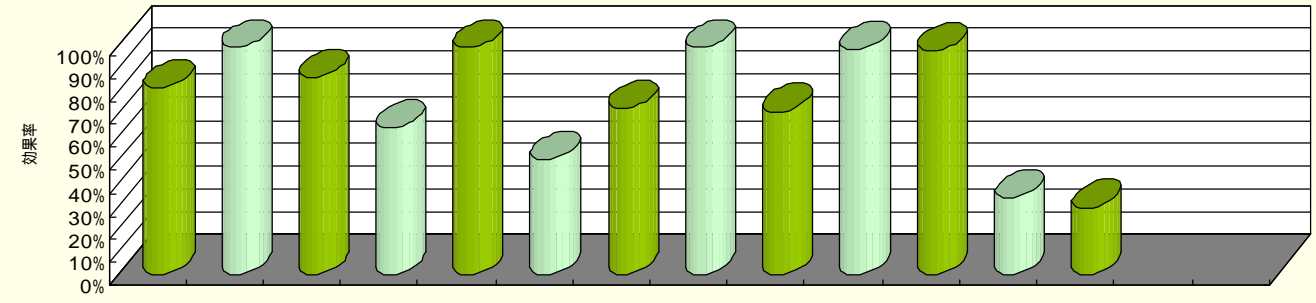
総合治水対策の進捗により 被害額は減少している。計画完成時の80～100%程度の効果が生じている河川もあるが、20～70%程度の河川も多い。

被害額の軽減

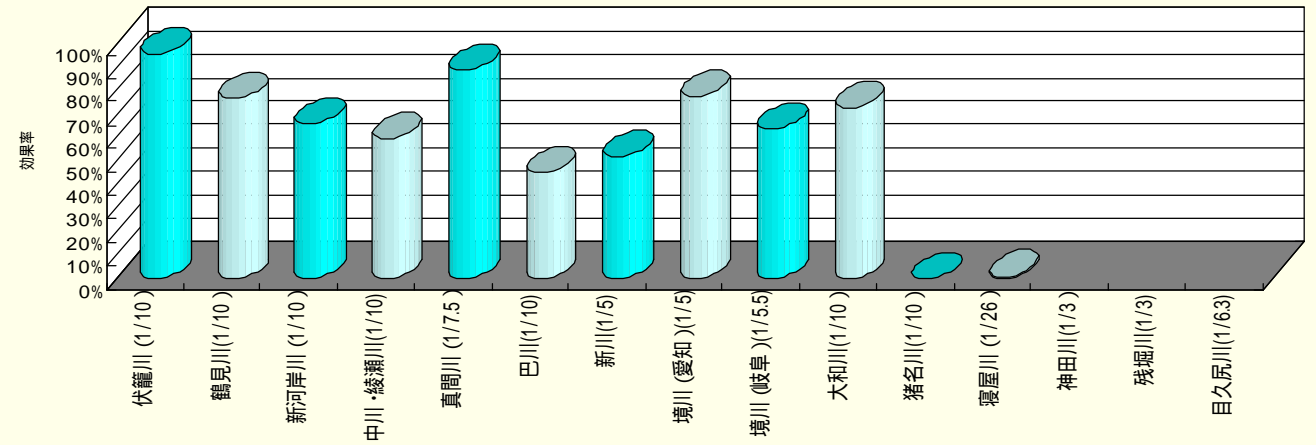
総合治水対策全体の効果



治水施設整備の効果



流域対策の効果



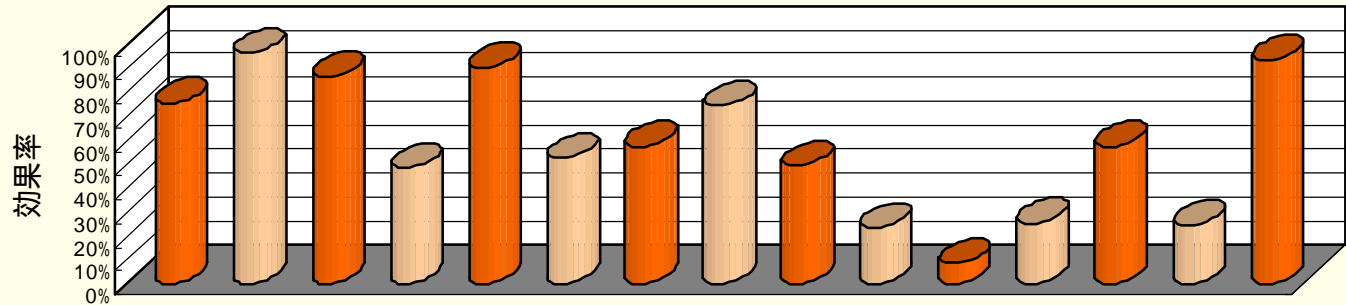
効果率 =  $\frac{\text{現況までの効果量}}{\text{計画完成時の効果量}}$   
 現況までの効果量 = 着手時点 - 現況時点  
 計画完了時の効果量 = 着手時点 - 計画完了時

【シミュレーションより】

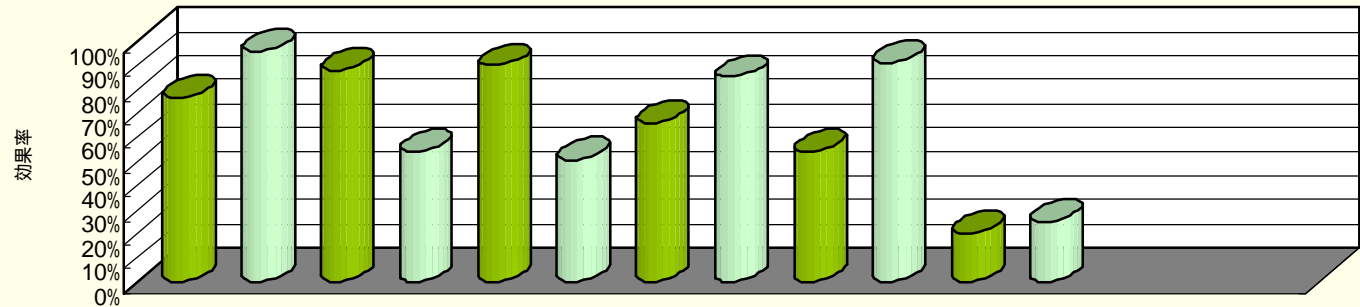


## 浸水面積の減少

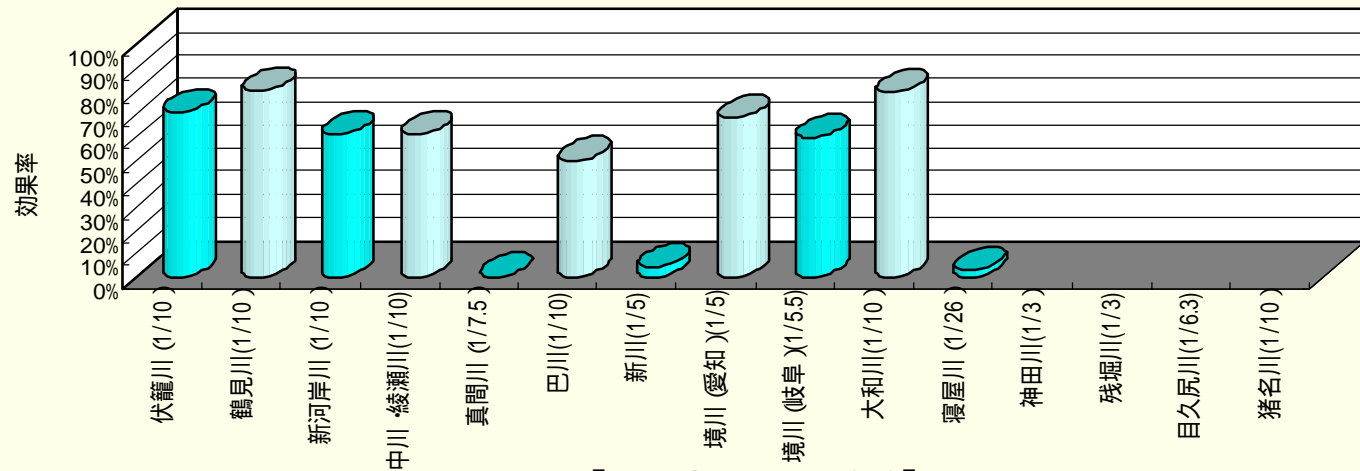
### 総合治水対策全体の効果



### 治水施設整備の効果



### 流域対策の効果



効果率 =  $\frac{\text{現況までの効果量}}{\text{計画完成時の効果量}}$

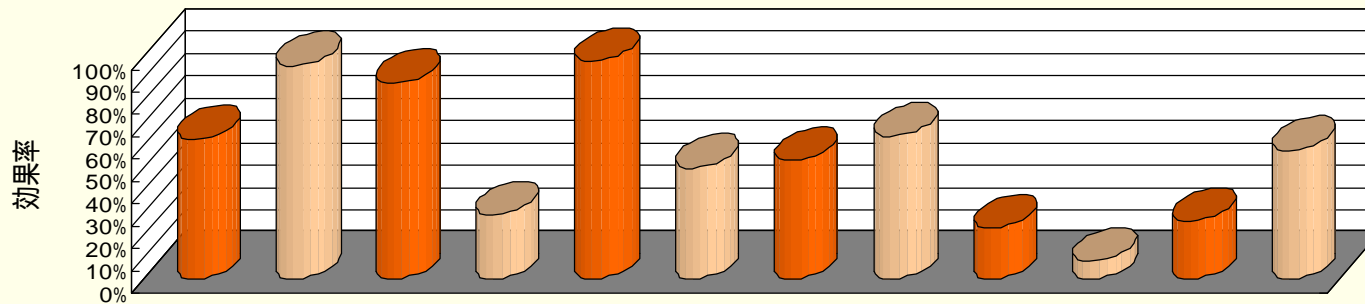
現況までの効果量  
= 着手時点 - 現況時点

計画完了時の効果量  
= 着手時点 - 計画完了時

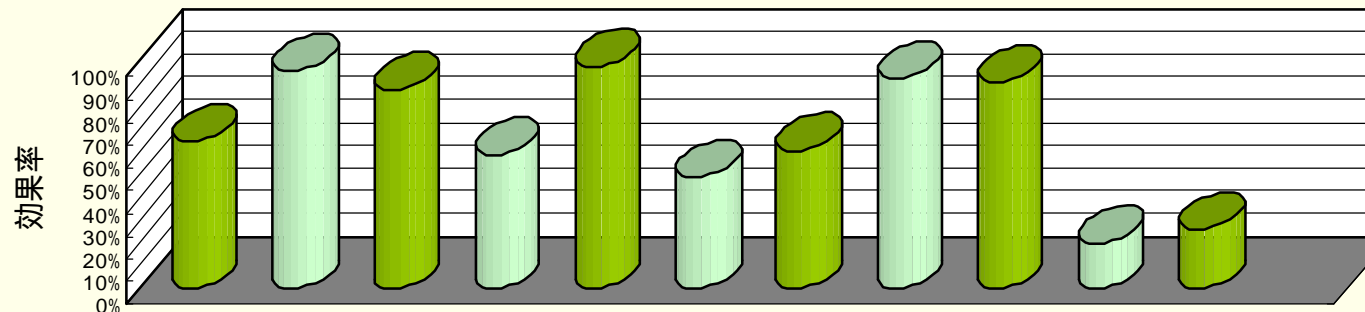
【シミュレーションより】

## 宅地浸水面積の減少

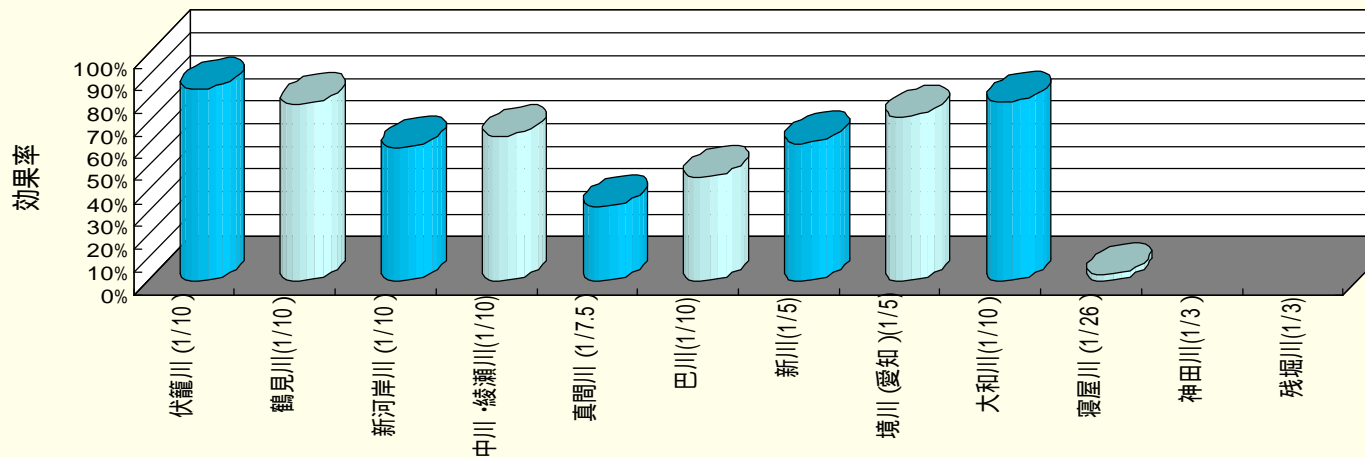
### 総合治水対策全体の効果



### 治水施設整備の効果



### 流域対策の効果



効果率 =  $\frac{\text{現況までの効果量}}{\text{計画完成時の効果量}}$

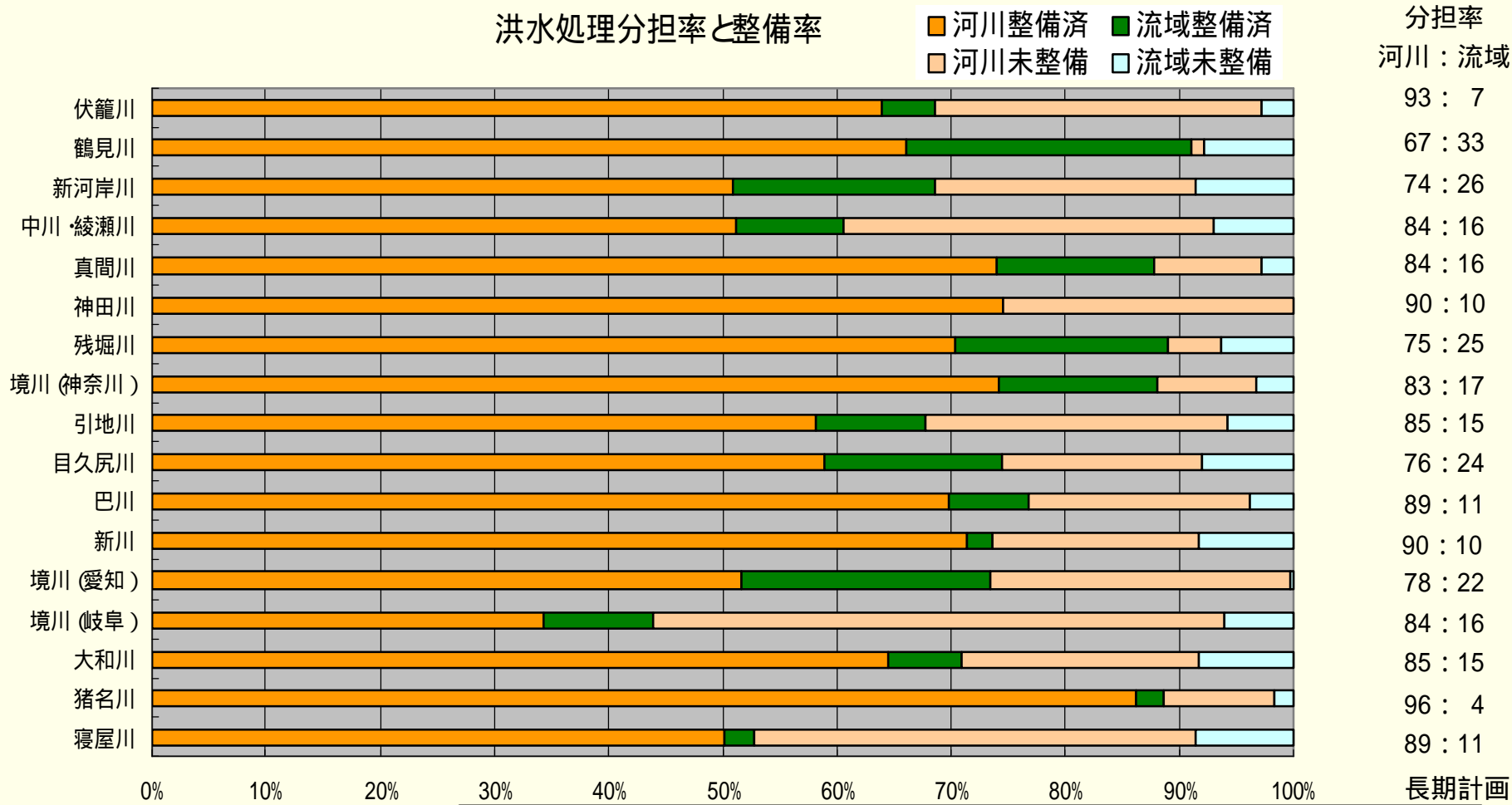
現況までの効果量  
= 着手時点 - 現況時点

計画完了時の効果量  
= 着手時点 - 計画完了時

【シミュレーションより】

# 総合治水対策の進捗状況

河道整備及び流域対策の進捗率は、概ね70%程度である



河川整備率 = 遊水地・放水路等を考慮した流下能力 / 基本高水流量  
 流域整備率 = 流域対策実施量 / 計画量

国土交通省調べ

基準点評価

急激な都市化に対する河川改修には一定程度対応したが、暫定的な流域対策を解除できる状況ではない。  
総合治水対策の進捗により、大幅な被害軽減が図られたが、宅地浸水を解消するためには更に整備（総合治水対策の完成）が必要である。

#### 被害軽減が遅れている河川について

中川 綾瀬川、  
巴川、寝屋川

計画目標年次が平成20年～平成22年と先であり、まだ整備の途中段階である。